

## 誰の声を聞きますか？

丸山 勉

### 【聖書】 創世記 12章 1～9節

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モシの櫛の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

### 【序】 旅立ち

約一年ぶりにまた「創世記」から神様の語りかけをお聞きします。この7月と8月はアブラムと神様との関わりをご一緒に聞いて参ります。創世記の第12章、それを今週と来週と二回にわたって読むようになっていますが、今日はその前半、アブラム（後のアブラハム）の信仰者としての生涯の第一歩が記されている所です。

ここに記されているテーマは、「旅立ち」です。

「主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。」そして、「アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。」とありました。

アブラムのこの時の旅立ちを促したもの、それはただ「主の言葉」であったと、そのことを聖書は明確に語ります。

では、アブラムは特別に神様から選ばれるような人物であったから、神様の言葉を聞くことが出来、それを受け止め、従うことが出来たのでしょうか？そうではないと私は思います。彼が一介の弱い人間であることは、来週学ぶ箇所ですが、この12章の後半の記事を読んだだけでも分かります。初めから神様に評価されているという点ではノアの方に軍配が上がるでしょう。6章9節には「その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった」と書いていますが、アブラムについては何も語っていません。けれども神様は、ノアだけではなく、アブラムに対しても声をかけるのです。このあともそうですね、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そしてその後も…。実は私たち一人ひとりにとっても同じです。神様は、ご自分がお造りになった全ての者に、人格的に「言葉」を持って語りかけられるお方です。聖書が伝える神様は「生きておられる」神様だからです。

### 【1】 「信仰」—地道で、継続的なもの

しかし、神様の声に従うということ、これほど現代人にとって受け入れ難いことは無いのでしょうか？「主体性」「自立性」が強調される次代です。昔の人間ならばいざ知らず、「神」という幻想に縛られて生きることは愚かなことだ、と思う方は少なくないでしょう。「自分で自分の人生を切り開いてこそ、人生の価値はあるのだ。信仰に頼るということは、自分で自分の生き方の責任をとろうとしないこ

とだ」と思われる方も多と思います。かく言う私自身も、大学生になるまでそのような思いをどこかで抱いていたと思います。

けれども、この創世記の**アブラム**という人物をずっと追って見ていきますと、彼は**神様の言葉を聞いてその歩みを進める中で、その人生がグッと逞しくなり、個性的にもなり、正に責任的に生きる人生へと導かれて**いっています。

信仰、というのはある面、不思議だと思えます。そして初めから強い確信を持って信仰の歩みを進める人はまずいないと思えます。けれども、初めの**第一歩**というのが、とても大事なものだと思うのです。そこから**歩みを進める**ことですね。

**将棋の駒**の、一番弱い駒は何という駒でしょうか？「**歩**」(ふ)ですね。歩むという字が彫ってあります。その歩の駒が進み続けると、「**金**」になりますね、面白いですね、「歩」も歩み続けると、いつの真にか王様さえも脅かす駒に変身するのです。

信仰というものは、この「歩」のように、実はとても**地道なもの、また継続的なもの**なのではないでしょうか？何か手品のような、或いは魔術のような、直ちに結果が見えないと満足しないという思いは、健全な信仰ではないのではないのでしょうか。

むしろ、神様は私たち一人ひとりに**ふさわしく声をかけ、また育て、共に歩んで下さるお方**なのだと聖書は語ってくれていると思えます。

その神様は一人ひとりへの「**タイミング**」をご存知です。12章の4節にはこう記されています。

**アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。**

**75歳**という年齢、それはアブラムにとってはとても大切な時だったに相違ありません。彼の生涯は175歳で葬られた(25章)とありますから、まだ人生半ばです。その時神様はアブラムに「生まれ故郷、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と言われました。アブラムの父親はテラと言います。11:26を見ますと、テラが70歳の時、アブラムが生まれたとあります。そしてアブラムに神様が声をかけられたのはアブラムが75歳の時。よく読むと、父テラが生涯を終えた年齢は205歳だったとありますから、アブラムが神様からの促しを受けたこの時は、まだテラは生きていたということになります。

なぜ、神様はアブラムにこの時「生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」と仰ったのでしょうか？それは、当時、父テラがいたハラン地方は、**月を拝む偶像崇拜**が盛んであったからという説も言われます。それもあったのでしょうか。しかし、ただそこから逃れる、というだけではなかったでしょう。**神様の前に一人立ちする、という自立への促し**だったのではないのでしょうか？

## [2] 内面的促し

キリスト者の哲学者の**森有正氏**は、この**アブラハムの物語**をこよなく愛してよくお話をされています。私もその在りし日の『**アブラハムの生涯**』という講演の本を読み、心が震えた経験を持っています。その中でこのようなことを語っておられます。

「創世記の物語は至る所に神秘の雲がかかっています。アブラハムの物語の全体を通観致しますと、どうしても私どもはそこに**アブラハムの内面的経験の一つの成熟のモメント**を見ることが出来ます。というのはアブラハムの出発は、あまりにも決定的な印をそれ以後の人類歴史に刻みつけたからであ

ります。ここで**アブラハムの本当の経験**が始まります。…私はこの経験の端緒になるものを**く内面的な促し**>と呼んでおります。この内面的という意味は、**外からの影響や誘惑、成功とか立志とかお金とか、**という人間的な顧慮というものは**全く関係がない、という意味**であります。アブラハムのこうした内的な促しを外から支えてくれるものは**何もありませんでした**。

これは、とても深い洞察だと思われました。言葉を変えれば、人間的には何の保証も報いも見えない人生を、一個の人間として、**内面的な促しに従って**生きて行った、ということです。これは、客観的に見ると**理解を超えたこと**なのです。「何であそこまで信じているのか分からない」と他人は言うかもしれません。けれども、**信仰とは、“神様と私の物語”**なのです。神様の声を、この私自身に語りかけられている言葉として聞く、それが**第一歩**。そしてそこから始まる歩みは、人間的な成功とか繁栄を約束するものではありませんが、もっと深く、**神様の「祝福」が離れない人生**なのだ、と聖書は語ってくれていると思うのです。

12章2～3節に何回「祝福」という言葉を神様は語られているでしょうか。

「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」

何ということでしょうか！あなた個人を祝福するだけでなく、あなたの存在が**祝福の源**とさえなる、と言われているのです。

これは例えば、新約聖書の使徒言行録の言葉を思い起こします。「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。**」（使徒16:31）と。

### [3] 人は「神の言葉」で生かされる

「神様の祝福」、それは一体何でしょうか？色々なことを言えると思いますが、私はイギリスのメソジスト運動を起こした大伝道者ジョン・ウェスレーの臨終の言葉だと伝えられているその言葉こそ「祝福」だと言えるのではないかな、と思いました。

ジョン・ウェスレーはこう言いました。「**神が共におられるということ、これ以上に良いことはない**」と。本当にそうではないでしょうか？

それでは、この「神が共におられる」という告白は、どこで可能になるのでしょうか？頭の中でそのようにイメージすれば良いのでしょうか？いいえ！アブラムのことを思い起こしたいと思います。やはり12:4です。「**アブラムは、主の言葉に従って旅立った。**」—主の言葉、神様の口から語られる言葉を、**私自身の中心に受け止めて旅立つ、すなわち具体的に歩いていくこと、生きることと一つなのだ**と思います。

新約聖書の**イエス様の言葉**を思い起こさないではられません。

「人は**パンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる**」（マタイ4:4）

私は思ったのですが、私たちは、冷静に考えてみると、自分だけで生きているようでいて、実は「**誰か**」の**声**の**集合体**によって造られてきているのかもしれない。私たちの人生の中にはこれまで聞いてきた**沢山の言葉**が数えきれないほど入っている筈です。親の言葉、学校の先生の言葉、友人の言葉、親戚のおじおばの言葉、会社の上司や仲間の言葉、或いは様々な本からの言葉、また、この頃はインターネット経由の言葉など、もうそのような言葉の海の中にいて、時にはその海の渦の中に巻き込まれて呼吸が出来なくなってしまうこともあるのではないのでしょうか？

現代は特に生きにくい時代になっているように思えてしまうのです。厚生労働省の統計ですと、日本で自殺して亡くなる人の数は減少傾向にあるということですが、それでも年間2万1千人以上の方が自ら死を選んでいきます。しかも減少傾向にある中、10代で自殺してしまう方は増えているというのです。また、日本財団が約4万人を対象に自殺意識調査を実施した所、最近1年以内に自殺未遂を経験したことがある人は推計53万人に上ったということです。そして20歳以上の4人に1人が「本気で自殺したいと考えたことがある」と答えました。実際15歳から39歳までの死因のトップが自殺なのだそうです。これをどう考えたらよいのでしょうか？

私は単純かも知れませんが、思ったことがあります。この世界は、また、私たちの国は、真に「人を生かす言葉」が少なすぎるのではないのでしょうか、これは本当に教会の出番、伝道者の出番ではないか、と思ったのです。

例えば、「お前なんかいなくていい」、顔が見えない何人もの人に言われることによって死を選んでしまう若者がいます。ヘイトスピーチを浴びせられて病んでしまう外国人の方たちがいます。そしてヘイトしている人たちはどこか笑っているのです。どちらが病んでいるのでしょうか？ また、「生きること、また死ぬことに何の意味があるのだろうか」と突き詰めて考えていく者に、私たち人間はどんな言葉を語れるのでしょうか？

私たちは、何よりも、この世の旅路を行く時に、アブラムのように、ただ「主の言葉」を聴き、それを手離さないで生きていくことが大事なのではないのでしょうか。それをこの耳だけでなく、全身を貫く言葉として聴くのです。

イエス様も先の言葉（「人はパンだけで…」）を語られたのは、悪魔の誘惑に遭われた時でした。40日間断食をした後の出来事です。イエス様は、私たちが想像する以上に激しい戦いをされたのだと思います。この戦いに勝利しなければ、人はいつの間にか悪魔の巧みな誘惑に屈してしまう、死へと誘われてしまう、そのことを良くご存知で、人を本当に生かすのは、悪魔の言葉ではなく、神様の言葉なのだ、ということをごハッキリ示して下さいましたのだと思います。

イエス様は、「神の言葉」が人間になった（「受肉」）お方その人です。しかし、私たちはこのお方を全く理解しないで、それこそ「十字架から降りて来い、そうしたら信じてやろう」と、それこそヘイト（憎悪）の限りを尽くして殺してしまったのです。けれども、三日目にお甦りになって、神様を捨てた私たちを赦して下さいました。これは、一方的な神様の愛と憐れみに他なりません。私たちの命は、神の独り子イエス・キリストがご自身を犠牲にされるほど、比類なき価値があるものなのです！

### 〔結〕 礼拝者として生きる

創世記12章に戻りますと、アブラムに声をかけ、祝福の源とさえして下さいとお約束下さったのも、アブラムの側にはなんの功（いさおし）も無いのです。ただこの私を顧み、神様の祝福の中を歩めるように整えて下さった、その神様の愛が先行しているのです。私自身もこの神様が分かった時に、心底安心したのです。私の人生、どうなるうとも安心だ。裕福にならなくとも全然良いし、何かカリスマ的な才能が無くとも、その分必死になれば楽しいし、ああ、神様が共におられる人生は、深い所で喜びがあるなあ、と。そう思っています。

「アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。」（7節）アブラムは、自分と神様の立ち位置を心得ています。祭壇を築く。そこで妻と、またロトと主を賛美し、祈る。彼は、礼拝者として生き始めたのです。

私たちも同じです。礼拝の度ごとに、語りかけて下さる神様の憐れみを心に刻み、また今日は、特

に**主の晩餐式**も一緒に迎えます。イエス様が「わたしに聴き、わたしの愛の中にとどまっていなさい」と招いて下さっています。

感謝と悔い改めをもって晩餐の恵みを受け、今週一週間、また今月一ヶ月も、自分の存在を貫く言葉として御言葉を聴いて、旅路を歩んで行きましょう。

お祈りを捧げます。

御言葉そのものである主イエス・キリストの父なる神様、  
今朝、み言葉をお与え下さって心より感謝いたします。

色んなものを手に握って生きている私たちです。それが無ければこの世の旅路を生きていけないというほど沢山のものを抱えています。けれども、もしかすると、そのようにして、私たちは、私は、あなたに聴こうとせず、無視し、締め出しているのかも知れません。その罪をどうぞお許し下さい。

「人は、あなたの口から出る一つひとつの言葉で生きるものである」。どうか、わたしの心と生活に、あなたの言葉を蓄えさせて下さい。それが私たち自身を作りますし、また家庭を、またこの国をも作ることを信じます。どうか、あなたの愛をいっぱいを受けて、大胆に、また、絶えず喜び、祈り、感謝して生きる者とさせてください。

この世界から、私たちの内から、憎悪、争いを取り除いてください。

イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。